

^{99m}Tc-MDP 骨シンチグラフィー施行時に、RI アンギオグラフィーを積極的に施行し、得られた異常所見を検討した。

悪性腫瘍患者では、RI アンギオグラフィー施行症例の約半数で異常所見が認められ、転移性肺癌症例で原発巣の推定が可能であった例、心嚢液の貯溜を指摘し得た例、肝転移巣を検出し得た例などを経験している。RI アンギオグラフィーのみの検査は数分で施行可能で、積極的に併用することが望ましいと考えた。

12. HEADTOME による高速連続 SPECT の試み

駒谷 昭夫 高橋 和栄 大串 雅俊
山口 昂一 (山形大・放)
山岡 信行 (島津製作所)

リング型 SPECT の特長を生かし、Xe-133 クリアランス法の 1 分 1 フレームよりさらに高速の連続 SPECT 法の開発を試みた。

1 枚の断層像を得るためには、ターボファン型コリメータを 10 度きざみに 180 度回転し、その後検出器リングを検出器幅の 1/2 : 約 2.8 度の回転をはさんで、もう一度コリメータを 10 度きざみ 180 度回転させなければならない。これに要する時間は 12 秒が限度であったが、この間の放射能濃度や分布の変化が大きい場合、濃度変化に対する補正が必要であった。独自の補正法により、急峻な濃度変化が起こる動脈相でもアーチファクトの少ない画像を得ることができた。経時変化をパラメータとする画像は、SPECT 法では困難な吸収補正や、それに伴う定量性の不確定さなどの弱点を補う有力な方法と考えられる。本法は、Tc-99m 標識 DTPA、PnAO、HMPAO などの静注後早期の動態解析に応用できると考えられるが、適応に関しては今後の課題としたい。

13. 膝窩動脈捕捉症候群の 1 例

西沢 一治 鎌田紀美男 緑川 宏
(青森県立中央病院・放)
田中 茂穂 米田喜与志 菊池 積徳
(同・心血管外)

膝窩動脈捕捉症候群 (以下 PAES) は、膝窩部の解剖学的先天異常により膝窩動脈 (以下 PA) が圧迫され下腿の血流障害をきたす稀な疾患である。症例は 16 歳女子で、右下肢の間歇性跛行を訴えて当院を受診し、PAES を疑われて心血管外科へ入院した。

²⁰¹Tl 筋血流スキャンでは右下腿の分布減少を認め、歩行負荷直後と 4 時間後のいずれも左右差に変化なく、PA の閉塞が示唆された。

^{99m}Tc-MAA 動注スキャンでは、右膝窩部に hot spot 形成あり PA 内の血栓形成が疑われた。RI-angio. では、右足背屈、底屈安静時のいずれも PA の完全閉塞を示した。手術により、PA は腓腹筋内頭の異常筋束で圧迫され、血栓形成にて完全に閉塞しているのが確認された。本例は Insua の病型分類の type 2 に相当する稀な type であった。PAES は 30 歳以下の若年男性に多く、ASO や TAO と異なり手術により根治し得る疾患であり、早期発見が望まれる。

14. 肝および骨病変を認めたエヒノコッカス症の 1 例

清水 正宏 丸岡 伸 中村 護
(東北大・放)

われわれは、多房性肝胞虫症の手術後、6 年あまりで骨エヒノコッカス症を併発した症例の骨シンチグラフィーを経験し、その経過を観察することができた。

骨痛の早期診断に、骨シンチグラフィーが有用であることが考慮された。

単房性肝胞虫症の骨病変は、まれながら報告がみられているが、多房性肝胞虫症の骨病変に関する報告は調べた範囲では認められなかった。